

指定討論・総括

児 島 達 美

(長崎純心大学)

長崎純心大学の児島です。このシンポジウムに参加できて本当に良かったですね。シンポジストお一人お一人のご発表はもちろん、シンポジウム全体としてもめちゃくちゃ面白かったです。私は臨床心理士なんですけど、正直、こんなに面白いものを日本の臨床心理学は生み出せているかっていう思いを強くしましたね。

さて、まずは、牛久保さんにお会いできて、お話をうかがえたというのが最高の収穫です。牛久保さんは、この大変なご病気になられるまでは看護のお仕事をしておられた。つまり支援する側でずっとこられたわけだけど、今度は、支援される側になられた。こうした、いわば転回と言ってもよいご経験にもとづいて語ってくださったわけですが、そこにこそ大変意義深いものを感じた次第です。そして、牛久保さんご自身の転回のストーリーがスライドに見事に示されているんじゃないかと思ったんです。最初に鶏が出てきて、最後に野良猫が出てくる。お体の自由がほとんどきかなくなった牛久保さんは、この動物たちをじっと観察される中で段々と彼らとのコミュニケーションを深めていっておられる。牛久保さんは、ご病気を境にして、看護師から見事な動物行動学者になられたなど。かのローレンツもびっくりするんじゃないかなというぐらいの……、それがすごく印象的でした。

その上で、牛久保さんが語られた「こういう難病になられた患者さんや家族の心理はこうだというふうに固めないでくれと、その時々状況、文脈によって、それは幾らでも変化するんだ」というくだりは、私自身も含めて、あらためて支援者側それも特に専門家と呼ばれる連中の目を覚まさせて下さったと思います。我々は、例えばこういう病気になられた患者さんはこんな

るんだとか、ご家族はこうなるんだという、あるパターンをつけて、そこに焦点化し、理屈を考えて、支援に向けてのある目標を設定するような、そういう教育を受けてきましたし、実際、私も今、大学でもそういうふうな枠に陥りがちです。しかし、どうもそうじゃなさそう。特に専門家たちこそ、ここから学ばないとダメなんじゃないか、と実感しました。ありがとうございました。

次は、同じく当事者のお立場からの安田さんのご発表ですが、お父様がこの大変な病気になられ、家族としてその苦悩を分かち合われる中で、今では、もっとも重要な支援者となる家族を含めた支援者のためのシステムをつくらうということでご活躍しておられる。そして、何よりも驚いたのは、お父上の病状の進行の速さでした。私も、一応知識の上では、この病気の特徴について知ってはおりましたけれども、例えば進行一つをとっても、こんなに個人差があるのかということについて認識をあらたにさせていただきました。

そして、お父様の病状の進行の速さとも関連するんですが、とくにその最も身近な支援者となる家族の苦悩の実態について、同様の病気を抱えたある家族内での大変不幸な事件の詳細な報告を通して語ってくださった点はとても重要な問題を提起していると思いました。今日では、まだ不十分とはいえ、医療福祉に関する制度や外部からの支援サービスが整備されてきました。ですから、この事件についての社会一般の反応の多くが「どうして、その家族はSOSを出せなかったんだ」ということになるのもある意味では無理もないところでしょう。しかし、なんですよ。みるみるうちに心身の機能が低下し、特にコミュニケーションの手段が失われていく患者を前にした家族にとっては、そういう中でSOSを発信するということが思いつかないし、そういう福祉制度があっても、それが利用できるということすら、どこかにすっ飛んでしまう。そういう意味で、特に告知直後における精神的ケアというか、精神的というところの中身を、ケアする側は、もっとよく考えてみる必要があるように思いました。具体的に「こういうことがありますよ」と言って、患者さんはもちろん常にご家族にも言ってみれば覚せい度を上げるような支

援が必要なんじゃないかなという気がしますね。「大変ですね」なんていうような安っぽい共感なんてだめです、こういうときは。きちっと具体的な支援の情報を伝えるということが必要なんだなということが、非常によく理解できました。

さて、発表された方々の順序が逆になってしまいましたが、最初のお二人の若い研究者である日高さん、それから安達さんのお話をうかがっていて、いずれも質的研究ってここまで来ているのかということ、ものすごく実感しました。日高さんと安達さん、それぞれポイントは違うんですけども、その根底には、「研究者というのは結局、社会的な文脈の中でこういう位置づけになるんだ」ということ、つまり、質的研究における研究者とインフォーマントすなわち研究協力者の方々との間でのあらたな相互的な研究のあり方を、若い人たちがこういう形で仕事してくれるのは本当にうれしいです。もちろん、これまでも研究者側の視点と研究協力者側の視点、あるいは、当事者の視点と第三者の視点ということになりますが、その間のズレのようなものを意識することの必要性についてはたしかに言われてきているように思います。安達さんもおっしゃってましたかね、アウトサイダーとインサイダーとかって。それが今まで、どうしても分割されるきらいがあって、議論のされ方も、「アウトサイダー視点ではこうなんだよ」、「いやいや、インサイダーじゃこうなんだよ」となりがちでした。それが両方の間で新しい考えとか何かが出てくるんだということころまでは、なかなか今まで行きませんでしたよね。そういう点からすれば、このお二人が今回ご発表された研究は、それ自体ですでに社会貢献となっているなあー、と僕は納得いたしました。もちろん、それぞれの具体的な研究方法については、それはそれでいろんな議論がこれからできるんだろうと思います。そのことについて、私も非常に関心があるんですけども、とにかく、以上申し上げたことがこの若いお二人の研究者への基本的なコメントです。

その上で、もう少し具体的なことで二つほど触れてみたいことがあります。一つは日高さんのご発表の中に出てきたインフォーマントの方の実名を出す

かどうかという話です。我々研究者のこれまでの常識でいけば、インフォーマントの方については実名は出さないということになっていますね、守秘義務あるいは個人情報保護という観点で。それはそれで重要なんだけど、インフォーマントの方ご自身が実名を出して欲しいというご希望を出された場合でも、我々はどうしても慎重になるんじゃないでしょうか。私知っている範囲でも、そうしたケースで結局は実名は出さないということで研究者側がインフォーマントにお願いしたということがあります。しかし、僕、大賛成ですね、実名を出すということについて、基本的に。

実はこれ言い出すと長くなりますが、実名つまり固有名詞は、名詞の中でも、非常に特殊な位置にあって、昔から哲学者や論理学者さらに現代の言語学者たちも、その取り扱いについてはみんな頭を悩ませてきたという歴史があるんですよ。具体的に言うと、固有名詞は翻訳できないんです。ということは、いわば一般理論の中に組み込めないんですね。「他でもないこの人」というまさに固有性そのものを指し示すんです。そういう点で、実名を出すことの意義について、あらためていいなという感じがしましたね。

ただ、まだ日本の研究の風土とか文脈で、即それで行こうなんていったら、また別の方面からいろんな議論が出るかもしれませんが、むしろインフォーマントの方々が自分を実名で出してくれとおっしゃってくださること、それをシンプルに研究者側が、じゃあ、一緒に行きましょうという感じになっていくのはいいですね。となると、仮に日高さんなり安達さんが今回のご発表を何かペーパーにまとめられるときは、少なくともファーストオーサーは日高さんや安達さんじゃなくて、インフォーマントの方がファーストオーサーになるんじゃないですか。共同研究だから。それを今までは、せいぜい最後のアクノリッジメントでしょう、「いろいろご協力いただきましてありがとうございました」という程度の。これじゃ話にならない。恐らく今後は、研究協力者の方も共同執筆者としてきちっと名前が出るという、そういうことを期待しますね。きっとこの学会、やるでしょう。お二人がその先頭に立ってやってくださいということ。

もう一つ、安達さんのビジュアル・エスノグラフィー、これも大変おもしろ

ろかった。特に思ったのは、単に映像を見せてどうですかと言っているわけじゃないですね。映像に関して研究者側はこういうふうに見て、こんなふう
に考えたんですという、コメントをつけたものを見せてインフォーマントの
方にどう思いますかと尋ねておられる。ただ撮っただけのものを渡してどう
ですかというのと、安達さんがやられたような形で提示するのでは、全然コ
ンテキストが違いますね。前者だと、これについて、この人はこう言いまし
たという感じで、意見を聴取してまとめるとこうなりました、という旧来型
の形になるんだけど。安達さんが出された映像についてのコメントは単なる
感想ではなくて、安達さんの考え方について、さらにそれについてのイン
フォーマントの方からのフィードバック込みになっているわけだから、そのと
ころのポイントは非常におもしろく意義深いと思いました。

以上、長くなりましたが、私の感想めいたものです。どうもありがとうござ
いました。